

25年の大会を締めくくる熱戦が繰り広げられた泥田バレーボール大会
11月2日午後3時10分ごろ、大分県中津市（撮影・南條進）



泥んこバレーの元祖といわれ、大分県中津市三光佐知の田んぼで続いてきた「泥田バレーボール大会」の最後の大会が2日あり、西日本の7府県から参加した88チーム、約750人が雨が降る中、泥まみれの熱戦を展開。大会は25年の歴史に幕を下ろした。

大人も子どもも泥んこになって楽しむ大会は1989年、減反田を地域活性化に生かそうと、地元の町おこし団体「竹馬会」（約70人）が始め、その後全国各地に広がった。初

泥んこバレー

最後まで熱く

大分・中津

夏の風物詩となったが、運営するメンバーの高齢化から今回で終了することにした。

第1回から連続で出場してきた同県九重町の自営業松岡泰之さん（45）は「足場の悪さに加え、風や天候に左右され、セオリー通りにいかないところが魅力だった」と最後の大会を惜しんだ。竹馬会の佐賀一彦会長（56）は「選手の笑顔を見るのが私たちのやりが이었다。皆さんからお疲れさまでという言葉をいただき、続けてきて本当に良かった」と語った。